

第3回日本国際保健医療学会総会

第3回日本国際保健医療学会総会が昭和63年7月16日と17日に開催された。7月17日は午後1時から午後4時30分まで「世界の人口問題を考える」という題のシンポジウムが行われ、埼玉県立衛生短期大学長村松稔博士の司会で、シンポジスト 人口問題研究所長河野稔果、フィリピン人口問題研究所教授 Mercedes B. Concepcion 博士、元NHK解説委員 長岡昌氏、国立病院医療センター国際協力部長我妻堯博士からそれぞれ報告・討論があった。
(河野稔果記)

日本統計学会第56回大会

日本統計学会の昭和63年度(第56回)総会および研究報告会は、7月25日(月)から27日(水)までの3日間にわたり、福島大学経済学部(福島市松川町)において開催された。

本年度の研究報告会では、例年設けられていた「人口統計」の部会はなく、「計量生物」の部会で次のような報告が行われた。

5. Gompertz 則の1つの老年学的意味……………冨家 孝(大阪公衆衛生研究所)
6. 年齢別死亡率曲線が記録した事件……………大久保正一(日本大学・人口研究所)
7. J.S.SüßmilchとL.A.J.Queteletとの学問的つながり
 についての批判的研究(その2)……………飯淵康雄(琉球大医・医学部)
(廣嶋清志記)

日本老年社会科学会第30回大会

日本老年社会科学会(会長:那須宗一淑徳大学長)の昭和63年度第30回大会は、9月16・17日の両日、仏教大(京都市)において開催された。老年社会科学に対する関心の高まりを反映して、本大会の研究報告は96件の多きにのぼり、多角的な研究の発展と活発な討論がなされた。

本大会は学会創設30周年にあたるところから、とくに水谷幸正仏教大大学長の「生きる」と題する記念講演のあと、那須会長が「学会30年を迎えて」と題して学会30年の回顧と展望を行い、高齢化がますます進むなかで、老年科学に関する学際的な研究を一層発展させることが急務であることを強調された。

また本大会では、きたるべき超高齢化社会に備えるには、思いきった発想の転換と学際的アプローチが必要であるという立場から、社会学、社会福祉学、経済理論、財政学等の見地から、「21世紀にむけての老年社会科学の課題と展望——思想として、科学として、政策として、技術として——」をテーマにシンポジウムが行われた。このなかで、人類初めての経験ともいえる「晩期老人」型の高齢化に対して、社会や家族がどう対応し、いかなる政策がとられるべきか、逆に「政策」がどこまで対応しうるかなどの非常に重い問題について活発な意見の応酬がなされた。

人口研究の観点から興味深いものとして、次のような報告があった(プログラム順)。

- | | |
|----------------------------------|---------------|
| 学校教育における「エイジング教育」のカリキュラム開発に関する研究 | 谷口幸一(鹿屋体育大学) |
| 沖縄の長寿文化について | 片多 順(福岡大学) |
| 所得源泉の転位からみた高齢者世帯群の実態的考察 | 前田正久(日本体育大学) |
| 高齢者問題の日中比較——東京と上海の比較調査研究(1) | 清水浩昭(人口問題研究所) |